

読書が好きな元気な女性

田中裕香さんは読書が好きで、推理小説や料理の本を好んで読んでいます。しかし彼女自身は本を買いに行ったり、図書館に借りに行ったりすることはほとんどありません。それはある日から昼間に外に出ることが難しくなってしまうことからなのです。

太陽の光が

18歳の時に突然の発熱が裕香さんを襲います。熱は数日たつても下がらず、入院しても、具合は悪くなるばかりで、病院を変えても原因や病名ははっきりしませんでした。

入院と退院を繰り返し、原因も分からないまま時間が過ぎます。その後「膠原病」と認定されたのは6年後の24歳のときでした。

膠原病の症状にはさまざまなのがあります。裕香さんは太陽の光を浴びると、それだけで40度近い熱が出てしまい、数日は寝込んでしまいます。原因は分かりま

せんが、日光の影響で発熱すると分かったのは3年前と最近のことです。それまでは理由も分からず病気と闘い続けていました。それでも裕香さんは努力して調理師の資格を取得、大阪のイタリアンレストランで働き始めました。しかし体調を悪くして倒れてしまい、熊本に戻ることにあります。膠原病は、裕香さんが調理師として働くことも許さなかったのです。

図書館利用を願う母

家に居ることが多くなった裕香さんは何かを始めたいと考えました。運動は薬であるステロイド剤が効きづらくなるので禁止されていました。そこで、中学校まで習っていた書道を再開します。再開して4年間、長時間練習はできせんでしたが、裕香さんの才能は開花します。昨年開催された「熊日新人書道展」に初出品し、見事特選を受賞したのです。

長時間の書道はとても体力を消耗します。その合間に裕香さんの

心にゆとりをもたらしてくれたのは読書でした。東野圭吾や赤川次郎などの推理小説や映画の原作小説を好んで読み、生活に本は欠かせないものとなってしまいました。しかし本を買いに行くことは難しいため、母の友子さんに本を買ってきてもらっていました。しかし欲しい本と違う本を買ってしまうと買い損になってしまいます。そこで図書館の利用を考えました。

望む人には、本を

図書館カードを利用できるのは本人だけです。しかし裕香さんのために本を借りたい友子さんは、図書館に代理貸出をして欲しいと頼みました。図書館はそれを許可し、友子さんが代理で本を借りることができるようになりました。母の願いで裕香さんは図書館の本を読むことができるようになったのです。

これをきっかけにおおづ図書館は、図書館に来ることができない人に本を借りることができるようなサービスを開始しました。おおづ図書館は、病気などで来館でき

なくても町民であれば利用することができると図書館を目指しています。裕香さんと友子さんの思いがこのサービスの向上につながったのです。

わたしのこの一冊

裕香さんに人生の中で感銘を受けた一冊を聞いたところ、さくらももこさんのエッセイ集「さくら日和」だと言います。

それはよく読んでいる推理小説でもなく、料理の本でもなく、エッセイ集でした。理由は、病気で入院しているときにこの本から元気もらったからだと言います。つらいときでもその本が持つ楽しい雰囲気、裕香さんに元気を分けてくれたのです。

本には人を元気づけ、時には人生を変えるような力があります。

いつか旅行に行くことが夢だという裕香さん。

「とりあえずは旅行雑誌を図書館で借りて読みたいと思います」と笑う彼女はとても輝いてまぶしく見えました。

本とわたしと 図書館と



本を読みたいー

彼女の願いと欲求、

利用する人と図書館との距離を縮めたいー

図書館がいつも思っている目標、

その二つの思いが

きれいにつながり、そして広がりました。

読書の欲求から発展した図書館のサポート

あなたのための、

わたしたちの図書館という思いは

いつまでも変わりません。

身体的な理由などで来館できない人については、代理人の選定をしてもらえれば図書館を利用することができます。「目が不自由なので本を誰かに読んでほしい」などの理由でも、ボランティアが家庭を訪問することもできます。気軽におおづ図書館までご連絡ください。